

第9章 石 ～不思議な石の物語、「バンブチ石」の話～

1 蓮如の腰掛石(三ツ屋町)

文明3年(1471)6月、越前・吉崎に滞留中の蓮如上人が四十万村へ訪ねる途中、手取川が増水のため渡ることができず、来丸村の五郎右衛門宅に留まり時を過ごしました。手取川の水もようやく減水し渡れるようになり、別れを惜しむ村人たちに、傍らにあった大きな石に腰掛けて、教えを説きました。その石が現在、寶海寺に安置されています。



2 のの石・ばば石(上徳山町)

徳山町から県道へ出たところに「ながもとの大岩」といわれる大きな岩があり、その傍らに小さな岩が仲良く並んでいます。

昔から大きな岩を「のの石」といい、小さい岩を「ばば石」と呼んでいます。大きい「のの石」は年に米1粒ずつ成長し、小さい「ばば石」は年に米1粒ずつ縮むといわれます。

昭和の中頃、耕地整理の際、この岩を動かそうとしたところ、4月の晴れた日にもかかわらず、にわかに曇って霰混じりの恐ろしい日になり、動かすのを諦めたそうです。

3 神様伏拝岩(舘町)

神社本殿横の隠居神の前にある自然の石碑です。昔、武士が馬に乗って、この神様の前にさしかかったところ、突然馬が逆立って進まず、武士は馬を降りて神様を伏し拝んだそうです。石碑は、その記念に建立されたとのいわれがあります。





4 いわやま(大口町)

「いわやま」は、集落から大口～和佐谷の道を約400mばかり進んだ左側の山にあります。現在は地主の方の業務用の用具置き場となっています。

昭和20年～30年の10年間ほど、主に住宅用の基礎部分に使われたと考えられ、需要があったのかもしれません。石切職人が2～4人、他に5～6人の働き手が出て、石山(いわやま)から村の中まで専用のトロッコがあり、繁盛していたようです。

切り口の高さは15m、奥行きは直線的に、また幾何学的に切り取られていて、当時の職人の腕がうかがわれます。大口石切唄もあり、現在でも謡われています。

ハァァァァー／雨の降るヨに／石切り跡に／しづく落ちるか／岩谷山に
ハァァァァー／黄金波うつ／奥山田んぼ／今日もきこえる／チョンナの音が

5 蛙石(湯屋町)

「大谷の口の塘(つつみ)の中から引き揚げ、拝殿の石段右側に座す」と記述されています。神社は大正13年(1924)に竣工しているので、蛙石の鎮座はそれ以後と思われます。



6 岩蛙(寺畠町) 平成25年建立

県道54号線の新規取付けは寺畠地区の大改革で、関連道路の整備を兼ねて平成14年(2002)には、神社新築移転と地区公民館の改築移転を成し遂げました。この公民館前の斜面沿いに「岩蛙」があります。設置者は集落の田中正次氏で、自らの敷地を地域の協力を得て「寺畠公団・ひまど」に整備し、「幾歳を村人守り岩蛙」の句札を付けてあります。なお「ひまど」は、とても味わい深い森林空間です。



コラム「盤持（バンブチ）の話」

「盤持(バンブチ)」は大きな石や重い俵を担ぐ力競べで、主に若者の力を試すものでした。しかし力を試すだけでなく、石または米俵を担ぐことによって、一人前の男、若者として認められる証明でもありました。また娯楽の乏しい当時としては、「バンブチ」や相撲は若者たちの楽しみ、遊戯として、青年団や集落の行事として行なわれ、日常の生活とも結びついていました。盤持の行事は神社の境内や集落の広場で行われ、その広場は「ばんぶち」「ばんぶちば」と呼ばれていました。

「バンブチ」には、自然石を使って行うものと、俵に米、小豆などの穀物を詰めた俵を用いた二種類があって「石バンブチ」「俵バンブチ」という呼び方をしていました。4斗石くらいは、丸抱えにして一挙に摺り上げながら肩に持って行きますが、6斗、8斗となると、少しのくぼみや出っ張り(コブまたはタコともいう)を利用して抱え担ぐ方法もあり、これらの担ぎ方を「はね返し、はね起し」と呼んでいました。また1石(こく)以上の大石(130kg)を担ぐときは、手の届かない間をつなぐため縄を用い、この縄を「カイナワ」「テフナ」「カイビキ」「ハンブチ縄」と所によって違った呼び方をしていました。(イラスト参照)

「石バンブチ」が盛んに行なわれたのは、明治から大正期、昭和10年頃までで、戦争のため若者が少なくなって中断し、戦後に復活することなく過ぎてしまいました。



① 先ず、手縄を
押しただいて
から動作を始める



② 石がとどかない間
を縄でつなぐ



③ 持ち上げた
膝を立てる



④ 摺り上げながら
肩へ持って行く



⑤ 肩に担ぎ上げると
同時に腰を切る



⑥ 担ぎ上げた
姿勢

(のうみ8号・山下和夫氏「盤持ち(バンブチ)の話」より抜粋しました)

江戸中期から伝わる「盤持石」は、各村の神社境内に4斗(米俵1俵分、60kg)から1斗(15kg)ごとに用意された卵形の丸石です。当時の米1俵(5斗、75kg)を担ぐと、一人前の若衆として仲間入りが出来ました。祭りには観衆の前で力自慢を披露することで、その能力に応じて賃金や結婚等で優遇されたといわれています。元来この石は石占いの一種で、持ち上げたり、投げ上げたりした時の軽重の感じ方で、神意を判断するものでしたが、次第に若者の力試しに変わったものと考えられます。農山村では、力持ち、体力の増強が生業の必須条件とされており、余興に始まったのが行事となったのではと思われます。農業の他に材木や石材の切り出し、手取川の渡し人足、護岸工事などで体力の養成が必要だったのです。ここでは市内で記念石として保存されているものを紹介します。各碑の説明は重複しますので省かせていただきます。

7 盤持石保存碑(下ノ江町)

平成2年建立



8 盤持石保存碑(福岡町)

平成19年建立



9 盤持石(寺井町)

平成14年建立



10 盤持石(湯谷町)

昭和61年建立



11 盤持石(秋常町)

平成18年建立



12 バンブチ石(灯台笹町)

平成9年設置



13 盤持石記念碑(宮竹町)



14 ばんぶち石記念碑(金剛寺町)

平成元年建立



15 ばんぶち石(鍋谷町)

